



全日本キックボクシング
KICK OVER-V
4月29日 ● 東京・後楽園ホール

心身ともに強くなった佐久間晋哉 天敵、杉木広臣を破り、フェザー級王者へ 「最悪ですね…、 こんな試合では 立嶋に怒られるよ」



●全日本フェザー級王座決定戦 3分5R
WALSHLEY(海外)対戦
○佐久間晋哉 (5R判定3-0) *体重50-51, 50kg, 50歳
●杉木広臣 *体重51-52, 51kg, 24歳

○「ダメですね、こんな試合じゃ、後半、逃げに入っちゃいましたから…」ときおり笑顔のぞかせた佐久間だが、かなり反省していた

ましてや、立嶋を倒すことでもできなかったのではないだろうか。過去を顧みると、すべての流れが要素が、この結果を導いているような気がしてならない。

その大きな、きっかけを作ったのは、今回、佐久間とフェザー級のベルトを闘うことになった、杉木広臣なのだ。運命は面白い。2年前、佐久間は杉木にKO負けを喫し、タイへ渡り、ムエタイにかぶれてしまったことがあった。いわゆる、自分からは仕掛けず、蹴ってきたら返す、ポイント重視のスタイルに変貌してしまっただけだ。

たしかに、それも大事だ。しかし、あくまでも佐久間の本来の持ち味は、鉄砲玉のように相手に突っかかることである。所属ジムの八王子Yの小林秀次館長は、それをよく分かっていた。だから彼に1年間、試合をさせなかったのだ。

悩んだ。自分のスタイルでは、杉木に勝てなくて、新しい可能性を求めたのだから当然である。

ここで墜落するか、またやり直せるか、小林館長も大きな賭けをしていたことだろう。結果、佐久間は後者を選択した。

相手の攻撃を待つクセは、なか

まるで別人のようだった。立嶋篤史から判定勝ちを収めた佐久間晋哉は、また違ったフレッシャーを背にして、メインの階段を駆け登った。

かつて立嶋を破ってきた日本人の例から漏れず、それは宿命のようなものである。やはり、ラッキードだったのだ。所詮、そこまでの選手なのだ、元から。立嶋を破った者にとって、これだけは言われたくない。このタイトル戦に辿り着くまで、佐久間はそんな苦しみ味わってきた。

だから、変わっていた。自分の内に秘めた、何かドロドロとしたものが、一気に吐き出された。

これまで佐久間は、ただ無意味に打っていた。デビュー当時は、あと先考えずに鉄砲玉のように飛び出

なか消えなかったが、それでも結果はついてきた。立嶋戦が、悩んだ末の一つの大きな結晶である。

あとは、杉木を越えて、フェザー級のベルトをとれば、物語の第一部は完結する。

1Rは、そのままの勢いが感じられた。意地、いや、自信からくる強さである。右のジャブが良い。杉木の足を止める、鋭いパンチだ。大柴ひろしの腕を折ったミドルキックも、疾っている。

パンチも単発ではない。右、左、そして右と杉木を襲う。立嶋戦よりも、いいじゃないか。杉木もやや面喰らっていたことだろう。こんなにも成長していたことだろう。そして、2Rに勝負が動いた。いきなりラッシュをかけたのだ。もちろん、佐久間が、である。

杉木は、懸命にブロックしていたが、ついにダウン。続けざまに、再び杉木はダウンを喫した。

あと1回、これで勝負が決まる。おそらく、佐久間は、この試合で初めて焦ったことだろう。詰めだけは甘かった。後半に巻き返されて、最終的に会場を震った形で盛り上げるようになったのだ。

それも彼らしい。試合後、見出しに書いたコメントを残した佐久間は、逃げに回った自分を憎んだ。まるで第二部の始まりを告げる合図のように高らかに。

(松井)

立嶋に勝ったのは、
ブロックではない

それを佐久間は
証明したかった



○万全休すと思われた杉木だが、後半は左ローキックを主体に立て直し、佐久間を追い詰める
○結局、最後は判定に、二度のダウンを喫った佐久間が勝利を収め、全日本フェザー級のベルトを手にした
○杉木に二度、敗北を喫している佐久間だが、この日は別人のようだった。右のジャブで杉木の出足を止め、左右のパンチを3つから4つ以上のコンビネーションで攻め、優位に立った



伝統の
全日本フェザー級の
ベルトは、佐久間の腰に

試合	宮下	健	少	白竜	山中敬雄
対戦相手	佐久間	杉木	佐久間	杉木	佐久間
1	10	10	10	9	10
2	10	9	10	6	10
3	10	10	10	10	10
4	10	9	10	10	10
5	10	10	10	9	10
合計	50	45	50	44	50



○立ち上がった杉木に対して、佐久間は一気にラッシュ。左右のパンチの連打で、再びダウンを奪った
○最初のダウンは右、ミドルキックから、左、右とストレートを送り、佐久間は杉木をマットへ倒した



○「試合の記憶が、まったくなくて、すみません…」と杉木。彼のコメントが、敗退の跡を物語る
○タイのルンビニー・スタジアムで、勝利を挙げた全日本バンタム級王者の貝沼豊太がリング上から挨拶。5・30全日本キック後楽園大会では、東海太郎の挑戦を受けるハードなスケジュール